地域がつくる暮らしやすさ

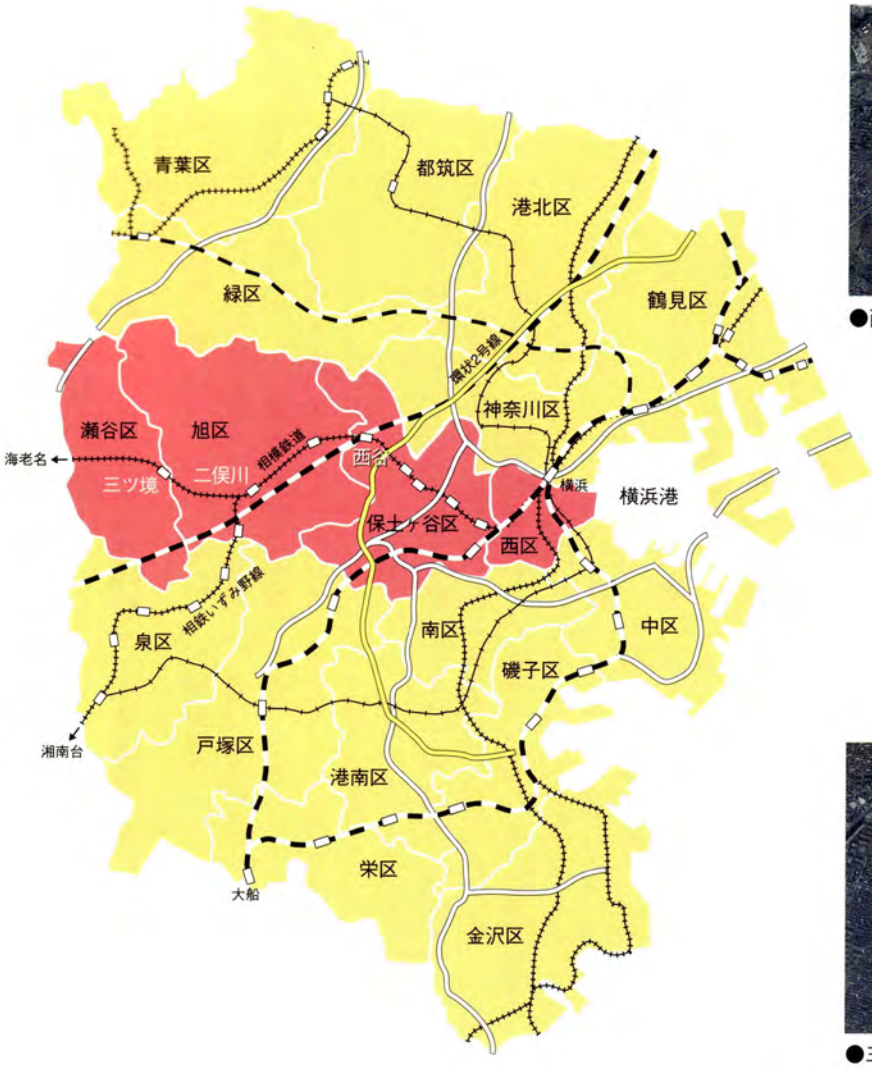
Part 3

港と郊外を結ぶ鉄道沿線

相鉄沿線駅前商店街のチャレンジ

西谷・二俣川・三ツ境（保土ヶ谷区・旭区・瀬谷区／相鉄本線沿線）

新橋・横浜間の鉄道開通は、明治5年（1872年）。以来、横浜の都市としての骨格は、基本的に鉄道整備によってかたちづくられてきた。田園都市沿線以外は、横浜駅を結節点とし、外延部に向かって鉄道網が放射状に伸びる構造になっている。それも、鉄路が河川と平行して走るなど、市域の丘陵と丘陵の間にはさまれた奥行きのある谷間に沿って鉄道路線が伸びている。
また、昭和30年代までの郊外部の市街化は、横浜駅から伸びる各私鉄沿線に沿って、駅周辺を中心に自然発生的に進展していった。
加えて、この時期の市街地の拡大は、主に横浜都心部に住んでいた住民が、就労の場を都心部に置きつつ、そのまま外延部へと住居を移転させたことによる。その点では、昭和40年代以降の東京からの開発圧力をもろに受けた市街化の進展とは異なり、まさにオリジナルな横浜の「郊外」の形成だった。
ここでは、相鉄（相模鉄道）本線沿線をモデルに取り上げ，昭和30年代～40年代までに鉄道沿線に形成された自然発生的市街地の中からその駅前商店街にスポットをあててみる。そして、周辺の住宅地も含めた、これからのまちづくりのありかたについて考えてみたい。



●西谷

●二俣川

●三ツ境